

支那金石學概要 石刻

馬衡 著
水野清一 譯

第一、刻石と碑の別

第二、造像と畫像の別

第三、經典諸刻と紀事諸刻の別（以下次號）

第四、一切建築物附刻の文

商周時代には器を見ること國家の存亡官位の高下と同一であつた。故に孔子は「たゞ器と名とは人に假すべからず」^①といつたのである。その銘を勒するにみづから名づけて先祖の美を稱揚し、これを後世に顯彰したのはまたその名と器を重んずるの意を昭示したわけである。はじめには文によつて器を顯彰したが、後には器に藉つて文を傳へるやうになつた。それで後世の器は必ずしも文をもたないのである。周室が衰微して諸侯が強大となつてからは名と器とがやうやく輕ぜられ功利のみ重ぜられるに至つた。こゝにおいて文章を誇張の具となし、石刻の文がはじまつた。だから石刻の文は全く石に藉つて文章を傳へるもので、器の文が文によつて器を顯彰しようとするのとは意味がちがふ。

刻石の風は秦漢時代に流行し、後漢において極盛となる。魏晉に及んでしばしば刻石の禁をかさねたが、南朝に至つてもなほ改らない。^②隋唐は北朝の餘風をうけて、事巨細となく、多く石に刻してこれを記念した。これより以後も引つゞきはなはだ盛んで、つひに石刻の文字はほとんど支那各地に徧滿するに至つた。

石刻の種類と名稱とは十指にかなへきれない。形體によつていふものがあり、文體によつていふものがあり、たゞおほまかに碑といつてしまふものもある。錯綜紛糾してゐて、區別することはよほどむづかしい。その類別を論じて第一には刻石と碑との區別、第二には造像と畫像との區別、第三には經典諸刻と紀事諸刻との區別、そして第四にはあらゆる建築物に附刻され

た文を擧げる。そのおのおのの細目については各條の下に分つてこれを述べることにする。

①『左傳』成公二年。

②葉昌熾『語石』卷一、晉二則、北朝四則等に碑禁のことが見える。

一、刻石と碑の別

いまの人は石に載録するものはみな碑とよぶが、これは正しくない。碑を刻することが盛んになつたのは漢末にある。それより以前はたゞ刻石としかいはなかつた。秦の始皇帝が山東の瑯邪に至り、海上に議した。その時羣臣は議を上して「古の帝は……なは金石に刻して自ら紀をなす、……いま皇帝海内を並一し……羣臣は相ともに皇帝の功德を誦す、金石に刻してもつて表經せん」といつた。①それで始皇帝の東巡した郡縣における諸刻はみな刻石といつて、はじめはまだこれを用を果すための設備で、文章を刻するためのものではなかつた。『禮記』祭義に「君は牲を牽く……既に廟門に入り、碑につなぐ」といふのは廟門の碑を指すので

ある。『禮記』檀弓に「公室に豐碑を視る」といふのは墓にある碑をいふのである。廟門の碑は石でつくり、犠牲をつないだり、太陽の影を測つたりする。墓にある碑は木でつくり、繩を引いて棺を下すのに用ゐるものと『儀禮』聘禮注および『禮記』檀弓の注に見えるところである。その形式はいまから推測することはできないが、とにかく今日のいはゆる碑のごときものではなかつた。碑に文を刻するのは漢以後のことであつて、古刻に關して論ずる必要はない。たゞ、相傳へる古刻のうちにもまた碑といふものがあるから、こゝで古刻の眞偽を一應辨じないわけにはゆかないのである。宋以來、金石を著録する書において三代の石刻を述べるものは夏に峒嶼碑、盧氏摩崖があり、ならびに禹の手蹟と傳へる。般に紅崖刻石があり、傳へて高宗時代の刻とする。錦山摩崖は箕子の書と傳へてゐる。周において檀山刻石は穆王の刻、石鼓文は史籀の書、延陵季子墓字と比干墓字は孔子の書と傳へる。②しかし、その實、峒嶼碑は唐宋人の記載に見えるが傳聞の辭にすぎぬ。いま傳はるものは明人の模刻である。明の郭宗昌は既にその附會たることを辨じた。③盧氏摩崖

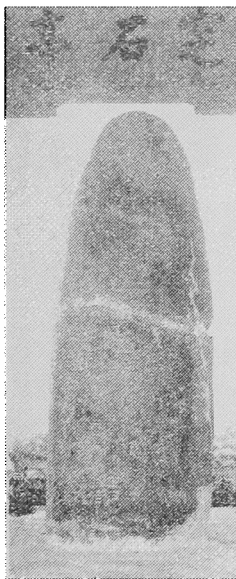
はたゞ一字のみで、清の劉師陸は釋して「洛」とするが、羅振玉は拓本を見てたゞ石理の交錯せるもの、字ではないと考へた。^⑤紅崖刻石は俗に諸葛誓苗碑と稱してゐる。清の鄒漢勳は釋して殷の高宗が鬼方を伐つた刻石とし、莫友芝はまた辨じて三危山における禹の手蹟とする。議論は紛々として定論なく、趙之謙は苗民の古書ではないかと疑つてゐる。年代悠遠にして證據とてないが、この邊が眞實に近いものであらう。錦山摩崖は或は釋して箕子の書とするが、朝鮮の人は秦の徐福の題名と稱する。葉昌熾は古に徵據なく、半ば附會によるといふ。壇山刻石は宋の歐陽修が『穆天子傳』と「隋圖經」とによつて周の穆王が贊皇に登つた時に刻すところとする。^⑥しかし、趙明誠は既にそれが正しくないことを疑つてゐる。^⑦延陵季子墓字については宋の董道の曰く、孔子は嘗つて吳に行つたことがないからその書の是非あきらかにし難い。比干墓字は隸書である。なほさら孔子の作ではあり得ない。宋の洪适、婁機はともにその誤謬たるを辨じ、後漢の人の書たることを斷定してゐる。^⑧すべてこれらはみな文人が奇を好んでの穿鑿附會である。或はもともと字がないのに

はつきりと明言したり、或は訛をもつて訛に傳へ、強ひて時代を定めてゐるのである。これについては既以前人の考訂があり定論が具つてゐる。かくて古刻は石鼓を措いてその他はみな信じられぬと斷言できる。なほ宋代に出土した秦詛楚文はやゝ信じえられる。思ふに三石とも久しく佚して、その形制がどうだか知れないが、宋人の著録する所によるとこれも亦決して碑ではないらしい。それで碑を刻する風尙は當に漢末に興り、古はたゞこれを刻石とのみいつたと考へられる。刻石のひとり立つものは碣といふ。天然のものはこれを摩崖といふ。いま碑とともに以下に分述しよう。

碣 『史記』始皇本紀に石に刻して德を頌するといふものすべて七たび、すなはち鄒嶧山・泰山・瑯邪・碣石・會稽はおのの一刻、之衆は二刻、その文には必ずはじめに「石を立つ」といひ、おほりに「石に刻す」もしくは「立つ所の石に刻す」といふ。いはゆる立石とはすなはち碣である。『說文』石部に「碣とは特立の石なり」といふのはこれである。その形制は今日でもほぼ推定することができる。『山左金石志』^⑨に琅邪刻石の寸尺を記して「石の高さは工部營造尺の丈五尺、下

の寛は六尺、なかほどの寛は五尺、上半の寛は三尺、頂の寛は二尺三寸、南北の厚さは二尺五寸」といふ。また泰山頂上無字石を記して「碑の高さ、廣さ、厚さ一に琅邪臺のごとし、差する所も分寸に過ぎず」といふ。『雲麓漫鈔』に國山刻石天爾元年西曆二七六の形狀を記していふ「土人目して國碑といふ、石は圓にして八出し、米廩のごときをもつていふ」と。『國山碑攷』にまた「碑の高さ八尺、圍一丈、その形や、圓にして楕、東西の二面は廣く、南北は狭きこと四の一なり」といふ。『兩浙金石志』に禹陵石第一（篆書にして年月なし、阮元は吳の孫皓の刻と推定した）を記して「高さ六尺、周廣四尺、頂上に穿あり狀稱鍾のごとし」といふ。諸石を綜合して觀るに碣の形は方圓の間にあり、上は小

第一圖(Fig. 1) 禹 鑿 石



— 浙江紹興 —

さく下が大きい。石鼓の十石（それが秦の刻石であるといふわたくしの考へは別に述べたものがある）はひとしくこれと同じで、やゝ小であるといふにすぎぬ。從來まだこれを正しく命名したものなく、たゞその形が鼓に類するのつひにこれを石鼓といつたのみである。

國山刻石は諸字の攷證によるとこれもまたその形が鼓のごとくであるといふものがある。董道が説を附會して「武事は鉦鼓に刻す」といふはまた妄説であ



第二圖(Fig. 2) 石 鼓 — 北平國子監 —

る。漢の裴岑紀功刻石西曆一三七は上鋭く、下大にして孤筈のごとく挺立する。俗によんで石人子といふ。清の牛運震の『金石圖説』に見える。天璽紀功刻石天爾元年西曆二七六は第一石が高さ三尺五寸、周圍八尺九寸、その頂はさながら鐘形の上甬を截りつつたごとくである。第二石

は高さ二尺三寸三分、第三石は高さ二尺六寸二分、その周圍が第一石より小さいのは石に缺損があるからである（翁方綱『兩漢金石記』卷一八參照）。よつて俗によんで「三段碑」といふ。その各個が前後各行の字數を相ひとしくしてゐるのを見ると一石の折れたのでなく、もともと確かに三石が相累つて成り、全形は當に國山碑に似たものであつたことがたしかめられる。この二石は前述の諸石と形制や、異なるが、また碣といふことができる。前漢の趙羣臣上壽石²⁶ 趙王二十二年文帝後六年に當る、西暦前一五八²⁷ 前六一年後漢の宋伯望刻石²⁸ 西暦一四四はまだその形制をつまびらかにせぬが、ほゞこれと同類である。李賢が「後漢書」²⁹ 傳³⁰ 竇憲に「方なるものは碑といひ圓なるものは碣といふ」といふのはこれである。この形制は三國より後においてはわづかに一度だけ高麗好太王陵石³¹ に當る、西暦四一四に現れる。鄭文焯の記する所によると「高さ約十八尺、南に向ひ北に背す、約寬五尺六寸有奇、東西側は約寬四尺四寸有奇」といふ。是は中國の制に倣ひながらも、これをより崇大にしたものである。このほかには絶えて見ない。けだし碑の盛行してから後は碣の制はつひに漸廢した。趙岐

が圓石を墓前に立てんと欲する後漢書 趙岐傳のはむしろ當時の習俗を矯めて古に復へさうとの意にすぎない。⁽³¹⁾

摩崖 摩崖とは崖壁に刻するものである。したがつて天然の石をいふのである。秦の刻石のうちたゞ碣石の一刻は「碣石の門に刻す」といつて石を立てたといはない。おそらく摩崖であらう。この後では漢の鄒君

開褒斜道記
西曆六三
昆弟六人造家記
西曆八一
楊孟文

石門頌建和六年西曆一四八李君通閣道記永壽元年西曆一五五劉平國通道作

城記永壽四年西曆一五八李翕西狹頌建寧四年西曆一七一李翕析里橋卹閣頌³²

建寧五年
西曆一七二二
楊淮表記
熹平二年
西曆一七三三
等はみな摩崖^③のもつともい

ちぎるしいものである。そのはじめはその地に即して

石に刻し事を紀した山に伐り石を採るの勞力を省いた

だけ別に深い意味はなかつた。實に唐の紀泰山銘（西開隆云）

十四年大曆六年中興頌西曆七七一等はなほ秦の封禪頌徳の諸刻④

のごとくであり唐宋の平蠻頌^③唐大曆十二年、宋年月朔す攷へて皇祐五年となす

等は猶ほ裴岑刻石のごとくである。人その簡易にして

迅速にできることからつひに相率ゐてこれをなし、は

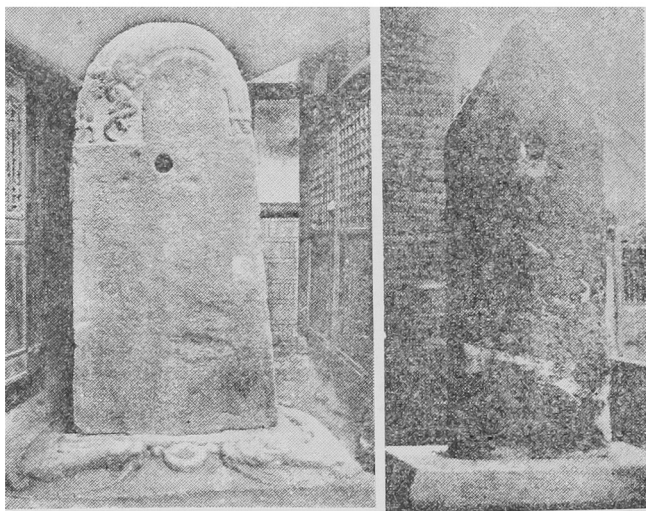
なはだしきは刻經・造像・詩文・題名・徳政・神道の

類に至るまで、これを崖壁にほどこさぬものなく、こ

ゝにおいて名山勝蹟にして石刻のないところはほと

どないといふ有様になつた。

碑 碑は廟門また墓所に用ふところであるのは既



第三圖(Fig. 3) 漢 碑 二 種

一碑首と圭首一

に上述のごとくである。しかし、これを用ゐて文章を刻するは果して何時からはじまるか。曰く、後漢のはじめにあり、桓帝・靈帝の頃に盛んになつたと。この

ことは宋以來の著録するところを見て知りえられる。漢碑の制は多く上部に穿がある。穿のほかに量といはれるものがある。すなはち、墓碑の輓轡をほどこした遺制である。けだし、そのはじめは墓所に棺を引くところの碑をとつてこれを利用し、その上に徳を述べ事を記したが、その後はこれを繰返してつひに習慣となり、碑は全く刻辭の爲にうけられるやうになつた。だから最初の碑には穿があり、量がある。題額には穿上量間に刻し、左に偏し、或は右にかたより、その勢にしたがつて必ずしもまんなかにない。碑文は額下に刻し、碑右にかたより、みな一面に充滿しない。魏晉以後は穿も量もやうやくすたれ。額は必ず中央に位置し、文辭は必ず一面に充滿するに至る。これらはみなそのもと文辭のためにもうけたものでないといふことの明證である。

碑の正面はこれを陽といひ、背面はこれを陰といひ左右はこれを側といひ、首はこれを額といひ、座はこれを趺といふ。質樸なものは圭首にして方趺、華美なるものは圭首にして龜趺、その式は一でない。圖第三 宋の洪适『隸續』の碑圖、清の牛運震『金石圖』にはみ

なその全形を描き、讀者をしてその原碑を髣髴せしめる。碑版を著録する例ではこれよりよい方法はない。その刻辭の通例は碑額に標題を、碑陽に文辭をつくり、碑陰、碑側には題名をならべる。その變例には兩面におのの一文を刻するものあり、長文にして碑陽に收めきれず、碑側或は碑陰にまで刻するものもある。佛教關係の碑はその額に多く像をつくる。唐の道因法師碑龍朔三年、懷仁聖教序咸亨三年のごときはそのもつとも顯著なものである。また佛教關係の碑でなくしかも造像するものは北魏の霍陽碑景明五年、東魏の齊太公望表武平八年の類がこれである。けれど、北朝は佛に倣りその適不適を考へず、一般に佛像をこのところにきざんだのである。それに後人が碑版の文字をつくるに必ず先例をこゝに求めることはまことに迂遠である。

①『史記』卷六、始皇本紀二十八年。

②延陵季子墓字は江蘇省江陰縣中港にあるが、宋崇寧間の摸刻であり、しかも磨泐せること馮雲鵬・馮雲燭『金石索』石索卷一に見える。比干墓字は河南省汲縣比干廟にあつた。

楊守敬『寰宇貞石圖』にその縮影を収む。王昶『金石萃編』卷一九、殷比干墓題字あり。

③岫巖碑は『金石索』石索卷一『寰宇貞石圖』に縮影を収む。『萃編』卷二、岫巖碑の條にいふ、「按ずるに、昶の藏する所の岫巖碑四あり。一は雲南昆明にあり。一は四川成都にあり。蓋し皆楊慎の募する所、慎は蜀の人にして雲南に謫戍するが故なり。一は長沙にあり、何人の重勅なるかを知らず、顧璘の跋に據るに乃ち明の嘉靖初、太守潘鑑の得る所たり、いま書院の旁にあり。一は西安にあり、康熙中毛會建の刻する所なり。昶は皆親しくその下に至りて摩挲して審らかに視、拓して之を藏す。後一拓本を見たり、乃ち明の安知山等楊氏本によりて募する所なり、その石は聞くに紹興禹陵にありと。石墨鐫華および金石存に謂へらく楊時喬は嘗つて棲霞に刻すと。嗣後に容璠は甘泉に刻し、張襄は新泉精舍に刻すこと甘泉文集に見ゆ。また高氏刻本あり、墨林快事に見ゆ。汲縣の刻本は黃叔瓚の重立岫巖碑記に見ゆ。康熙中通江の李藩が黃縣に刻することもまた撰する所の記に見ゆ。則ち五石に止まらざるなり。……たゞこの碑は南宋より始めて出づ。故に歐・趙みな著録せず。後來の考据家、楊慎・楊時喬・安如山・郎瑛の如き諸人は深く信じて疑はず、餘はみな斥けて偽物となす。いままた究めるに確證なし。……」と。

④郭宗昌『金石史』卷上、夏衡岳屢碑。

⑤この項不詳。

⑥紅崖刻石は貴州安順府永寧西北六十里諸葛營の後山にあるといふ。凡て四十字ばかり、入亂れて行をなさぬ。土人は孔明碑と稱する。張澍『續黔書』には殷の高宗が鬼を伐つた

刻石としたが、字蹟、地理よりむしろ三危山における禹の蹟とすべしと。莫友之「邵亭遺詩」(影山卿堂六種)卷六、紅山古刻歌に見える。

⑦趙之謙『補寰宇訪碑錄』卷一、紅崖古字には潘祖蔭原拓本黔中秦木本、陽湖呂氏縮刻本を借りて詳校するに「次第既に紊れ、且つ點畫文義能く辨析するなし、疑ふらくはこれ苗民の古書か、代遠くして考を失す」といふ。

⑧『補寰宇訪碑錄』卷一、錦山摩崖は朝鮮南海にありといふ。かきねて「字奇古にして識るべからず、朝鮮人傳へて秦の徐福の題名となす、或は釋して殷の箕子の書となす」といふ。

⑨壇山刻石は河北省贊皇縣南方十三里壇山にある。「石秦」卷一に縮影あり。『萃編』卷三壇山刻石を見よ。宋皇祐頃の發見にかゝり『集古錄』、原石は政和五年內府に入る、顧炎武『金石文字記』に「今移して儒學の戟門に置く」といふは嘉祐中李中祐の刻した石であるといふ。王澐「虛舟題跋」卷一「戲華蓋叢書所收」しかし、『萃編』卷三、壇山石刻には李中祐の模刻も既になく、見るところはたゞ南宋の刻本といひ、さらにその題名の下では「共に四字あり、右に李中祐記を刻す、額に吉白癸己之記六字を題す、正書いま贊皇縣學にあり」といふから現存贊皇縣學にあるのはさらに李中祐本からの翻刻か。孫承澤「庚子銷夏記」卷四に贊皇の翻刻本以外に中書謝從寧の刻本吳恭順惟英の刻本ありといひ、

宋濂『潛溪集』にはまた浦陽書院に模刻したことをいふ。

⑩歐陽修『集古錄跋尾』(朱氏金石叢書)卷一、周穆王刻石。

趙明誠『金石錄』(朱氏金石叢書)卷十三、吉日癸己字には

「案するに穆王の時に用ふる所は皆古文科斗書なり、この字筆畫反りて小篆に類す、また穆天子傳、史記の諸書皆載せず、これを以つてその是に非ざるかを疑ふ」と。

⑪董道『廣川書跋』(朱氏金石叢書)卷三、延陵墓字。

⑫洪适『隸續』卷二十、殷比干墓に「乃ち東漢成靈の時の人の書する所なり」と、婁機『漢隸字源』碑目、殷比干墓四字の條に「上世孔子の書と傳ふ、然れども隸は秦に始る、孔子の書に非ざるや必せり」といふ。

⑬三個あり。一は宋嘉祐中に陝西鳳翔府開元寺の土中より出で、二は治平中、渭水河畔の朝那湫より出土、三は洛陽劉忱家にありたりといふ。いづれも「絳帖」「汝帖」にその模刻本あり。容庚『古石刻零拾』詛楚文考釋に詳述されてゐる。

⑭鄒嶧山、泰山、琅邪の刻石は始皇二十八年、碣石は三十二年、會稽は三十七年、之罘は二十八年、二十九年の二刻がある。『史記』卷六、始皇本紀。

⑮晁沆、阮元『山左金石志』卷七。

⑯秦の刻石については論考少くないが、まづ容庚「秦始皇刻石攷」(燕京學報、第十七期)を参照されたい。泰山刻石については別に同氏の『古石零拾』中にも収められてゐる。縮影は『寰宇貞石圖』に泰山と瑯邪の刻石がある。

⑰江蘇省宜興西南五十里國山にある。『萃編』卷二十四、禪國山碑。宋の趙彥衛『雲麓漫抄』(裨海)卷一。

⑱吳騫『國山碑攷』(拜經樓叢書)。この文のあとに「碑首上銳にして微に窪む、色は紺碧、風雨剝蝕す」といふ。

⑲浙江省紹興禹廟にある。『萃編』卷十一、禹陵窆石題字。

②① 阮元『兩浙金石志』卷一、吳禹陵墓石題字。その字天璽紀功碑に似てゐるので吳刻と斷する。

②① 馬衡『石鼓爲秦刻石考』國學季刊、第一卷第一號。後民國二十一年に單行本を出す。

②② 史能之『咸淳毘陵志』(國山碑考所引)。

②③ 『廣川書跋』卷二、石鼓文辨。

②④ 裴岑紀功刻石は新疆巴里坤西北三里關帝廟にあつた。『金石圖』に「碑は西塞巴爾庫爾城西五十里にあり、石人子と名づく、碑は上銳下大にして、孤筈のごとく挺立し、之を望めば石人の如きを以てなり、雍正七年大將軍岳鍾琪は將軍府に移置す、十三年又師を撤し、漢詩亭侯廟に移置す」と。

『兩漢金石記』に「是碑は土人重刻する者あり、その眞本多く搨手の描失をなす、故に眞本亦往々同じからず、然れどもその描失の痕は乃ちこれ眞本なり、もし描畫の迹なく失誤ある者は眞本に非ず……長洲顧麐汀文鋹が濟寧に重刻せるは乃ち立海祠に作る、蓋し亦眞本より出づるに非ず」と。『萃編』卷七に「昶關中に在り、門人申兆定一本を重模し、石碑林に勒す、蒼勁ほとんど眞を亂る、故に亦時の愛む所となる」といふ。錢泳『梅谿居士縮本漢碑』に縮影あり。

②⑤ 天璽紀功刻石は江蘇省江寧府學にあり。錄文は『兩漢金石記』に見える。

②⑥ 河北省永平縣にある。鄒安『廣倉古石錄』(廣倉學倉叢書)に縮影あり。

②⑦ 熙孝禹刻石は山東省泗水に出て、歷城後李氏園に藏せられる。王懿榮『漢石存目』卷上。「廣倉古石錄」に縮影あり。

②⑧ 宋伯望刻石は山東莒縣に出づ。「廣倉古石錄」に縮影あり。

②⑨ 『後漢書』卷五三、竇憲傳によるに憲は匈奴を討つて燕然山に至り、紀功の刻石を立つ。その辭に「神丘に封し、降觴を建つ」とあり、その李賢の注に「神丘はすなはち燕然山なり、方なるものを碑といひ、圓なるものを觴といふ、觴は碣なり」といふ。

③① 滿洲國輯安縣にある。鄭文焯「高麗國永樂好太王碑釋文纂攷」(大鶴山房全書)、那珂通世「高句麗古碑考」(史學雜誌第四卷)「朝鮮古蹟圖譜」第一冊。

③② 『後漢書』卷九四、趙岐傳に「一圓石をわが墓前に立て、これに刻して漢に逸人あり、姓は趙、名は嘉、志あり、時命なきを奈何せんといふべし」と。嘉は趙岐の初名である。

③③ 永平六年裴斜道記、建和六年石門頌、永壽元年李君通閣道記、熹平二年楊淮表記は陝西裴城にあり、永壽劉平國通道作城記は新疆庫車城西賽里木山中にあり、建寧四年李翕西狹頌は甘肅成縣にあり、建寧五年李翕析里橋郡閣頌は陝西略陽にある。ともに『寰宇貞石圖』には墨影を收む。沈勒廬・陳子藝「寰宇貞石圖目錄」(江蘇省立蘇州圖書館館刊、第二號)參照。裴斜道記、楊淮表記、李翕頌には錢泳『梅谿居士縮本漢碑』及び『萃編』にも見える。

③④ 開元十四年紀泰山銘は山東泰山泰岳廟後石崖にある。『萃編』卷七六、紀太山銘。大曆六年中興頌は湖南省祁陽縣にある。『萃編』卷九六。

③⑤ 『金石錄』卷六に開元十九年唐平南蠻碑が見える。

③⑥ 『語石』卷三、論碑之名義緣起一則、碑穿二則。關野貞『支

那碑碣形式の變遷』昭和十年刊。

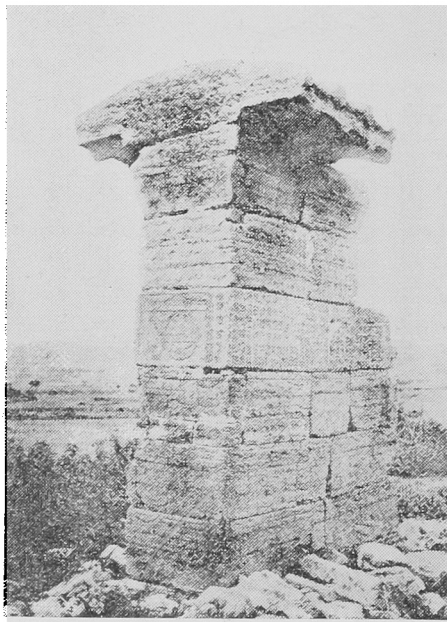
② 關野、前掲書、第三十圖および第三十一圖。

③ 景明五年霍陽碑は不詳。武平八年齊太公望表は河南汲縣にあり。『寰宇貞石圖』に縮影あり。

二、造像と畫像との別

文字のおこりは畫に端を發する。六書の象形はいはゆる「そのものを畫成し、體の詰詞にしたがふ」①もので、みな古代における最初の畫である。その後、天象を觀て服章をつくり、鼎を鑄て物を象るやうになつて、圖畫の一科がはじめて文字より出派してはつきりと獨立するに至つた。圖畫には平面的に象るものがあり、立體的に象るものがある。平面に象るものはこれを平面畫といひ、立體に象るものはこれを立體畫といふ。鐘鼎彝器の圖案における雲雷、饕餮等の文様のごときは商周時代の平面畫である。犧尊、兕觥の類は商周時代の立體畫である。後世石刻のいはゆる畫像なるものはみな平面畫、いはゆる造像はみな立體畫で、これがすなはち畫像と造像との區別である。いまこれを以下に分述しよう。

畫像 すべて平面に刻するものは人物・草木・鳥獸たるの論なくみな畫像である。② その最古のものには當に熙孝禹刻石の朱雀畫像を推すことができる。たゞ輪廓を具へるのみで、刻法は粗末である。前漢の畫で、わづかに存するものである。沂水鮑家山摩崖に刻する



第四圖 (Fig. 4) 石闕畫像 一河南登封開母石闕一

鳳凰畫像④はその題字中に「元□」等の字がある。前人或は「元狩」と釋し、或は「元鳳」と釋し、前漢の刻石とするが、その實「元□」等の字は「三月」等の字と一處にあるのでなく、決して年號ではない。後漢末

に至つてその風は最も盛んで、すべての祠廟や冢墓の間に多く精美な畫像がある。肥城の孝堂山、嘉祥の武氏祠、濟寧の兩城山のごときはみな洋々たる大作である。その他の殘缺の石は至るところに多く、頽垣、斷壁の間にも時々發見する。王懿榮『漢石存目』中の畫存はその收録もつとも完備してゐる。このほか碑額・碑陰の刻にして『隸續』碑圖に錄するところの如きものは指を屈するに耐へぬほどある。神道の闕は必ずしも字があるにかぎらぬが、畫象のないものはない。山東・河南・四川の諸省にあり、四川省がもつとも多い。すべてこれらの諸刻が描くところは武氏祠の帝王孝子・烈女・義士の畫像のごとく古人の事蹟であり、或は李剛・魯峻・武氏等の畫像のごとく墓中の人の事蹟であり、或は武氏祠祥瑞圖および洧池五瑞圖のごとく祥瑞圖であつたりするが、みな漢の畫である。魏晉になるとやうやく減少する。近頃、河南出土の晉當利里社碑^⑥殘石にはその陰の上部に社老等八人の像を列刻する。晉代の畫の今日に見うるはたゞこれのみである。北朝は喜んで佛像をつくり、その銘記の碑には往々平面の畫像がある。まづ佛の事蹟がある。北魏正光五年劉

根等造三級塼浮圖記に佛涅槃圖を描き、東魏武定元年清信士合道俗九十人造像記に釋迦降誕得道圖等を描くのはみなこれである。或は清信士女の像をつくる。これは造像の碑陰に見えるものが多いのである。隋唐以後、畫家が輩出し、聖賢仙佛鬼神諸像のほか兼ねて山水草木鳥獸等の圖を刻するやうになつた。こゝにおいて繪畫の能事はじめて大いに備れりと稱される。もし時代によつてこれを概括すれば、後漢の世は歴史畫多く、北朝以後は宗教畫多く、唐以後は自然界の畫が多いといへる。

造像 漢武帝元狩中、霍去病を遣して匈奴を討ち、その金人を獲た。武帝もつて大神と考へ、甘泉宮に列した。これが佛像中國に入るの嚆矢である。^⑨後漢末、丹陽の人笮融大いに浮屠寺を起し、上に金盤を累ね、下に重樓をつくり、黃金塗像をつくり、衣服には錦綵をもつてしたことが、後漢書陶謙傳に見えてゐる。これは支那における造像の記載に見える最初である。今日に存するものではまづ北魏をもつてもつとも早いものとする。山西大同の雲崗石窟はすべて十所ある。その五が北魏文成帝の時に造る所であるのは『魏書』釋老

志に見える。北魏の造像でこれより古いものはない。造像は三種に分たれる。石像、銅像と泥像である。

石像は多く方座の上に彫る。或は一佛或は數佛。或は立ち或は坐す。或は龕あり、或は背光あり。その記文は或は背に刻し、或は龕側に刻し、或は座上に刻す



第五圖(Fig. 4) 石像 一北魏景明元年一

る。このほかなほ方形で、柱のごときものがあり、高く幅廣くして碑のごときものがある。みな石を磨いて成り、各面の上部に龕を鑿り像を造り、下部に記文及び題名を刻し、陰と兩側には多數の小龕をつくり、累層排列し、おのおの龕側に題名をする。これらの小龕

は必ずしもみな佛像をつくるにかぎらぬ。或は死者の或は造像者の像をつくるものがあり、男女は列を分ち或ものは香花をとり、或ものは幡幢をとるなど、その狀はまた多様である。石を切採つて琢成するのでなく、たゞちに崖壁の上において龕を鑿り像を造るものはこれを石窟像といひ、或は石室といふ。記文は皆

龕の上下左右にある。雲崗・龍門の諸造像はこれに當る。佛龕の垂直にならぶものは上中下をもつて區分し、水平にならぶものは左右をもつて區別し、左右龕或はまた左右箱と稱する。その記文はまづ造るところの像(釋迦・彌勒像が多い)を記し、福を求めることに及ぶ。上は君國に及び、下は眷屬に及ぶ。はなはだしいのは一切衆生に及び、包括せぬものはない。或は一入一家の造作にかゝり、或は數十百人の造るところにかゝる。工事の大きなものは年を累ねて後でできあがる。造像の上には多く彩色を施して飾つてゐる。造像記を作るものがみな必ず文士だとはかぎらぬ。極めて鄙俗であつて、上下の文辭が照應せぬものがある。造作者の姓名を缺いで補刻を待つものがある^①

かと思ふと、舊像を修理して更めてそれに刻記するものがある。その題名や肩書は多様であつて枚舉に暇がない。清の王昶は嘗つてこれを集録したけれどもなほ盡すことができなかった^⑫。しかし、普通には「佛弟子」とか「清信士」とかいふ程度のものである。

銅像の小さいものはわづかに二三寸、大きなものもまた一尺餘にすぎない。その下に臺座のないものはない。臺座は或ものは四脚、或ものはその後の一面に脚を缺く。題字は臺座に鐫つたり、或は光背に鐫るが、文字は簡略で、刻み方が粗末である。多く全體に金を塗ること石像に彩色を施すやうなものである。

泥像は土をこねてつくる。それでこれを塑像ともいふ。『魏書』釋老志には眞君七年の詔を載せてゐるが、

それには「今より以後、敢て胡神に事へ、及び形象泥人銅人を造る者は門誅す」といふ。泥人はすなはち塑像である。土や木の質は壊滅し易いので、北朝の造像は銅と石のみで、まだ泥塑のものを發見しない。吳縣角直鎮保聖寺羅漢像^⑬は唐の楊惠之の塑するところと傳へる。楊は開元の時の人で吳道子と名を齊しうする。

傳世の泥像でこれより古いものはない。元の阿尼哥、劉

元などはみな塑像をもつて著名であるが、その作品は北京天慶宮等におけるものゝごとく既に現存しない。

唐の「善業泥」^⑭もまた塑像中の一種である。その制一面に佛像をつくり、一面に文をつくる。その文に曰く「大唐善業泥、壓して眞如妙色身を得たり」と。十二字、陽文で凸起し、全面に界格の線がある。その質は埴に似てゐる。土を搏つて火に焼いたらしい。北京旃檀寺の旃檀像^⑮は木に刻んだもので、相傳へて優填王の造る所とする。すなはち周の穆王八年辛卯に當る。元の程鉅天の「旃檀佛像記」にこの像の展轉流傳の歴史を述べ、その叙述は詳細であるが、特別に證據があるわけでない。しかし、それにしても元以前のものであることは疑問の餘地がないだらう。たゞ惜しいことに清末義和團の亂を経て、この像はもはや所在を知ることができないのである。

この三種のうち石像はもつとも多く、銅像これに次ぐ。泥像は千百の中に一も見ぬ程度である。^⑯

造像の風は北朝から唐の中葉に及ぶ時期が最盛と稱せられる。南朝は造像があるけれども北朝の萬の一にも及ばない。洛陽龍門の巖壁に累累とならぶものはみ

な北魏より唐代に至る造像である。黄河の南北にわたつて造像のこれより多いものはない。降つて五代宋初に至つてもこの風はなほ息まず、浙江の杭縣には吳越の時の造像が多く、山東の臨朐、嘉祥^①は北宋の時の造像が多い。これより以後になると少くなる。王昶は嘗つてその原因を推論して謂ふ、その時「中原板蕩し、……干戈接攘し、民その間に生れ、蕩析離居して寧宇なきに至る、……愚夫愚婦相率ゐて像を造り、以つて佛佑を冀ふ、百餘年來、寢りに風俗を成す^②」といふ。この言葉はよくその眞實をえてゐる。

唐代は道教を崇奉し、佛像のほか老君天尊の諸像を造るものがあつた。しかし北朝にも既にある。北齊姜纂造るところの老君像^③天統元年西曆五五六五のごときはその記文ことごとく佛教徒の口吻である。けだし寇謙之の天師をもつて治を佐けてより後は、佛教と道教とが混淆した。像を造るものはたゞ福を求めるを知つて、その佛像たるか道像たるかをわきまへないのである。

畫像と造像とはたゞに美術品たるばかりでなく、實に重要な史料である。漢の人が描いた周秦以前の故事は必ずしもすべてが正しいとはいへぬが、描くところ

は當時の事實である。凡て宮室・車馬・衣冠・禮樂・兵刃の類、みな漢代諸官の舊制である。考古の資料で、これほど適切なものはない。又これを藝術品として論ずれば藝術發展の迹を略考察することができ。

漢の畫は凝滯して型にはまり、人物はみな上が鋭く下が豊かで、衣褶は簡略である。六朝以後になつてはじめて凝滯から生動に向ひ、簡略から繁雜になる。たとへば晉の當利里社碑社老等像は漢の畫像と同じでなく、むしろ六朝の畫像に近い。その變遷の迹はこれをもつて知ることができる。けだし、その時には佛像が西方より渡來して以來年久しく、既に普及して支那固有の美術が西域美術と無形のうちに融合してゐたのである。宋の郭若虛『圖畫見聞志』^④に曹仲達、吳道子の體法を論じて云ふ「吳の筆はその勢圓轉として衣服は飄舉す、曹の筆はその體稠疊して衣服は緊窄す、故に後輩は之を稱して『吳帶當風、曹衣出水』と曰ふ」と。その論はもつぱら曹仲達、吳道子についていつたのであるが、しかし、六朝以後の體法の漢畫に異る所以はこの數語が實によく盡してゐる。

畫家の六法は劈頭に氣韻を重する。その用筆設色の

妙は石刻では充分に傳へえない。故に石刻の畫は眞跡に及ばぬ。六朝以來名工の妙跡は縑素のほか、往々寺壁にほどこしてゐる。いま河北、河南省などに宋元時代の壁畫にして、なほ現存してゐるものがある。敦煌に發見された唐以前の壁畫はみな東西各國の剝脱運搬によつて持去られた。『莫高窟石室祕錄』^①玉羅振および『高昌壁畫菁華』^②羅福の影印するところのものは、十の一二にすぎないのである。十四年春、陳萬里君は敦煌に古蹟を訪ね、西魏大統年間の壁畫を發見した。既に殘缺してゐるけれどもなほその一斑を窺ふことができる。洛陽乾溝村に新しく古墓を發見したが、そのうちの竈・闕及び墓門はみな塼質である。胡粉をもつて地をつくり、その上に彩畫をほどこしてゐる。北京大學の得たところの塼二個はみな墓中の闕柱である。その一は一人の武士を描き、その一は白兔が藥を擣く形と姮娥の像を彫り、さらに彩色をもつてこれを飾る。墓中の五銖錢および陶倉の隸書をもつて證すれば當に西漢末のものである。この類の神話は漢畫にもつとも普通に見るものである。漢畫にして眞跡であるは實に稀に見るところのものである。

① 許慎『說文解字』序。

② 『語石』卷五、畫像五則。畫像の著録は少からぬもまづ關野貞『山東省に於ける漢代墳墓の表飾』及び E. Chavannes; *Missions archéologiques dans la Chine Septentrionale*, Tome I, Paris 1903; *La Sculpture sur pierre en Chine au temps des deux Dynasties Han*, Paris 1893. を参照されたい。また容庚『漢武梁祠畫像』瞿中溶『漢武梁祠堂石刻畫像攷』等あり。

③ 『廣倉古石錄』。

④ 張德容『二銘祠堂金石聚』卷一に雙鉤本あり。また陸增祥『八瓊室金石補正』卷一參照。

⑤ 石闕については前記關野、Chavannes 等の著、四川石闕に關しては專ら V. Segalen, G. de Voisins et J. Lartigue; *Mission archéologique en Chine*, Tome I, Paris 1923.

⑥ 晉唐利里社碑は『廣倉古石錄』晉石社碑の縮影を見よ。

⑦ 北魏正光五年劉根等造三級塼浮圖記はいま開封の河南博物院に所藏される。そして顧燮光『古刻萃珍』に收めてゐるがそのいはゆる涅槃圖なるものは見えない。

⑧ 東魏武定元年清信士合道俗九十八人造像は F. Chavannes; *Missions archéologiques*, Pl. CCLXXXIV.

⑨ 金人を獲たことは『史記』匈奴傳、これを佛像と解するは『魏書』釋老志等。

⑩ 『語石』卷五、造像十二則。大村西崖『支那美術史彫塑篇』O. Siren; *Chinese Sculpture*, 4 Vols, London. 1925. E. Chavannes; *Missions archéologiques*, Tome II,

⑪題名の補刻を待つもの少くない。

⑫『萃編』卷三九、『語石』卷五、造像十二則。

⑬大村西崖『塑壁殘影』。

⑭『尊古齋陶佛留眞』卷上。

⑮『雪樓集』(湖北先正遺書)卷九。

⑯『語石』卷五、造像十二則。

⑰同書に「すなはち五代宋初に至りては錢唐の煙霞石屋諸

洞はなほ吳越時の造像多し、臨胸の仰天山、嘉祥の七日山、

皆北宋の時の刻なり」といふ。また前者については羅振玉

『石屋洞龍泓洞題名』の專著あり、關野貞・常盤大定の『支那

餘白に申す

この「中國金石學概要」なるものは馬衡氏の講義用プリントである。およそ北京大學の講義といふ

ものは全く初學者に對する概説でうめられてゐる。先端を行く様な新學説を唱導するところではないのである。

毎年同じ講義を繰返し、プリントは赤く日焼けてゐる。いふ方は相當に退屈でもあらうが、わたくしなどは半分程わからぬ支那語の講義に緊張して聞いたものである。諄々としてしかも簡潔な口調で説く馬衡先生の風貌は

いまも憶ひ出す。それにかうした親切な概説を缺く我邦の現状を思ふと譯してみようかと思ふことが時々ある。

このたびは小川茂樹君なり、塚本善隆氏があとを引受けてやるといふので急に第一回分を譯してみた、譯してみ

るとあまりに簡單なので少々もの足らぬ、註を書そへてみたがそれも譯者の心覺えにとゞまつて面白味はさらに

ない。だがわが邦の現状を正直にいへば斯様なものが必要なものでなからうか。手近い話に平凡社の「東洋歴史大

辭典」をとつてみよう。缺の項目はあるが碣はない、螭首があつても圭首や龜趺や壺は見えない。銅器は饌だと

か埴だとか相當にこまかく擧つてゐるが、刻石の項目はない。これは決して『東洋歴史大辭典』ひとりの責任で

はない。これは不當に金石學を無視してゐる一般の状況を反映してゐるにすぎないのである。馬衡氏は金石のデ

レクタンティズムを排し、科學的、歴史的研究に努力された。容庚氏をはじめ幾多有爲の金石學者はこの門から

出てゐる。羅振玉・王國維から馬衡、容庚氏に至るグループは正に金石學の正統派といへようか。書き方は簡單

だが陸和九「中國金石學」などにくらべると一見してその識見の相違が明白である。(昭和十二年十月十日)

佛教史蹟』第五冊にも見える。

⑮『萃編』卷三九

⑯『萃編』卷三十四、姜纂造像記、また『寰宇貞石圖』を見よ。

河南偃師にある。

⑰『魏書』釋老志。

⑱燉煌のほか高昌等の壁畫をさすもので、その調査はあまり

に有名であり、著録はあまり多いのでこゝには略する。

⑲『西行遊記』あり。その一四〇、一四一頁に大統四年比丘晉

化造像記、大統五年滑黑奴造无量壽佛記の發見をいふ。こ

れは墨書の銘で、ベリオ氏の第一二〇窟内に見出された。